

令和6年度 音楽 研究のまとめ

甫出 頼之・中村 恵美子

1 音楽科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について

(1) 音楽科が考える「教師の資質能力」の具体

音楽科では、児童・生徒がこれまでに積み重ねてきた音楽的な経験、新しく経験する音楽をもとに、自分自身や他者と対話をしながら音楽について思考し理解を深め、その価値を自ら見つける学習活動を重要視してきた。今井(2019)¹は「教科としての音楽」の意義を深めるためには、音楽を通して様々な知の世界とつながり、考え感じることによって、自己を省察し、変容させることだと述べている。つまり、音楽科教育には、音楽と関連する文化的・社会的・歴史的な知識の探究と、音楽的経験から得られた思考や感情の振り返りによる自己理解と成長を促すことが求められていると考えられるのである。これらのことを踏まえて、音楽科では、「音楽をとおして、世界をより深く理解するとともに、人生を豊かにすること」を「音楽科本来の魅力」と捉えた。

音楽科における「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」の3つのカテゴリーについて、小学校および中学校の授業実践結果を基に吟味した結果を以下に示す。

資質能力	音楽科が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・児童・生徒がこれまで親しんできた音楽や音楽的な経験や体験を基盤としつつ、未知・未習の内容に取り組む意欲を促す目標を設定する力。 ・音楽や音楽文化のもつ本質的な価値を捉え、児童・生徒に付けたい資質・能力と関わらせた教材を開発する力。 ・音楽を通して様々な知の世界とつなげる柔軟な発想力。
授業実践力	・楽器の演奏や歌唱といった音楽表現の技能を高めるために必要な表現の技能。 ・指揮と指示、ノンバーバルな働きかけといった指導技術。 ・「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実し「主体的・対話的な授業」を行うために必要な、ICT機器等の活用能力。
授業分析・評価力	・瞬間的に児童・生徒の演奏表現を捉える力。 ・授業実践を省察し、実践的知識を更新する力。 ・児童・生徒同士が共有した数多くの知識や感性を教師が的確に捉え、それをクラス全体に伝える力。

(2) 音楽科の特性に応じた見取りの方法について

本研究では、はじめに規定した「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」に基づいた授業を小・中学校それぞれで構想・実践する。次に、実践した授業において映像記録を基にした演奏・奏法の工夫・発話記録・授業後の振り返りから分析を行い、「音楽科本来の魅力」を踏まえた目標を、児童・生徒

¹ 今井康雄(2019),「学校教育と音楽 なぜ学校で音楽を教えるのか」,日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社, 26-27.

が達成することができたか、を検証し、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」の妥当性を検討する。

(3) 授業公開で見取った児童・生徒の姿の例

資質能力	児童・生徒の姿	手立て
授業構想力	音の高低・順番を意識しながら、これまで聞いてきた西洋音階とは違う日本音階の雰囲気を味わい深く聴き、一音の響きに集中して聴く姿があった。	・西洋音階と日本音階を一つ音ずつ卓上ベルで聴き比べ、「同じ」「違う」を聴き分けながらペアリングしたり、順番に並べるグレーディングをしたりする学習活動を通して、聴感覚を働かせる活動を実施した。
	「生活や社会の中の音」に興味をもち、さまざまな音を録音して、それらを使い楽しく創作活動を行う姿が見られた。	・生徒の身近な生活の中からテーマを見つけ、「生活や社会の中の音」を使って創作することで、音楽と生活、社会とのつながりを考えさせることができたようにした。
授業実践力	自分が演奏する以外の箇所でも、友達が演奏する音色を味わって聴く姿があり、グループの最後に演奏する児童は、その音階の中心音になるように、意識しながら音楽づくりをしていた。	・五音音階の響きを味わいながら、始まりや終わりの音をその音階の中心音になるように、音楽のまとまりを意識できるような声かけを行った。
	都節音階と民謡音階の旋律の動きから生み出される雰囲気を比較しやすいように、それぞれの音階に調弦された箏を実際にナガシヅメやヒキレンで演奏することで、より音階の響きの違いを味わう姿があった。	・日本の伝統的な音楽は、音階の構成が少し違うだけで雰囲気の違う独特の世界であることを感じることができるよう、音楽づくり活動を通して、旋律の特徴や音階の関わりを聴き取ることができる活動を設定した。
授業分析・評価力	日本の音階に対する思いや考えがある記述・都節音階と民謡音階の旋律の動きから生み出される雰囲気を比較し、聴き取ったことと感じ取ったことが関連付けて示されている記述があった。	・毎時授業後の振り返りの際、演奏を通して感じ取ったことを記述する場面を設定した。
	各グループの発表後、「グループのテーマが表現されているかどうか」という視点から興味深く感じた点や改善点についてロイロノートのカードに記入した。また、そのカードを発表したグループの共有ノートに送付し、グループ同士で意見交流をしながら創作活動する姿が見られた。	・タブレット端末のアプリ「ロイロノート」の画面共有機能を利用して、個々の意見を教師と生徒で共有しながら、さまざまな意見をまとめて集約した。

2 研究の成果と課題

成 果	○日本音楽のよさや面白さを感じながら、まとまりを意識して表現を工夫したり、五音音階の響きを味わったりしながら、日本の音階に親しむことができた。 ○都節音階と民謡音階に、各一面ずつ調弦された箏を実際に演奏することで、五音音階の響きから呼び起こされる日本の風情を味わうことができた。 ○鍵盤ハーモニカに音階シートを置き、わらべうたのリズムを活用することで、個別最適な音楽づくりの学びとなった。 ○「生活や社会の中の音」に興味をもって録音し、設定したテーマで他のグループの意見も参考にしながら、アンサンブルを創作することができた。
課 題	●音の重なりを楽しむだけではなく、その音の重なりによってどのような音響的效果が現れるのか考え、求める音のイメージをもちながら創作活動ができるような指導・言葉がけが必要であるとする。 ●音楽を通して、世界をより深く理解するとともに人生を豊かにするために、身の回りにある「生活や社会の音」や「日本に古くから伝わる音楽」と自分との関わりに気づき、そこから視野を広げて様々な世界の音楽に興味をもつことができる授業構想力が必要であるとする。 ●児童・生徒が音楽科本来の魅力に迫るための教師の資質能力を示すことができたが、9年間の児童・生徒の発達段階に応じたルーブリックを示す必要があるとする。